様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月 14 日現在

機関番号：12611
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520712
研究課題名（和文）　ワクフ経済の社会史：１６世紀ダマスクス州ワクフ調査台帳の研究

研究課題名（英文）　Social History of Waqf Economy: Study of the Waqf Survey Registers of Damascus Province in the 16th Century

研究代表者
三浦　徹（MIURA TORU）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
研究者番号：00199952

研究成果の概要（和文）：
オスマン朝時代（16 世紀）に編纂されたダマスクス州のワクフ調査台帳を解読し、1343 のワクフ寄進文書と 6, 478 件の寄進物件のデータベースを作成し、以下の分析をえた。(1)寄進の目的は、慈善用（宗教施設用）と家族用（財産の保全）とが同程度の重み（件数）である、(2)寄進者は富裕者に限らずわずかな財を寄進する「普通の人びと」に広がっていた、(3)寄進物件は農業資源が大多数を占め、ワクフ制度はそれを都市に還流する役割を果たした。

研究成果の概要（英文）：
This project studied the waqf survey registers of Damascus Province under the Ottoman rule in the sixteenth century and made a database of waqf donation deeds (1,343 documents) and 6,478 donated properties. It clarifies the three points. (1) The purpose of donation is to preserve private properties for the donor’s family as well as for the charitable use. (2) Waqf donation prevailed among ordinary people who donated one or two properties. (3) Agricultural properties occupied more than 80% of the total and were used for managing religious institutions in the cities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：史学、　東洋史
キーワード：ワクフ、寄進、都市、慈善、イスラーム、経済史

１．研究開始当初の背景

(1)ワクフとはなにか

ワクフは、イスラーム世界の独特の寄進行為で、慈善目的で個人の私有財（通常は不動産）を寄進し、当該財産からの用益（多くは賃貸借料）を慈善目的に用いるものである。宗教施設（モスクやマドラサ＝大学や修道場など）がこれによって建設・運営され、また

寄進された不動産は、耕作者や商人などに賃貸され、その収益は宗教施設の運営費として使用されるとともに、寄進者やその一族が収益を得ることも認められていたため、寄進者は家産を子々孫々まで継承・保全することもできた。ワクフに関する法規定が整ったのは９世紀であるが、とくに 11 世紀以降にはマドラサや修道場といった宗教施設の建設が盛んになり、都市の宗教文化施設と社会経済資本の整備がこの制度によって促進された。本研究の対象であるダマスクス（シリア）のワクフについて、14 世紀の旅行記では「数え切れないほどのワクフがあり、住民は互いに争うようにモスクや修道場やマドラサの建設を行う」と描写されている。

(2)ワクフの研究史

ワクフは都市の宗教施設や経済施設の建設に深く関わっている。このため、都市研究の分野では早くから注目され、個別都市についての研究が蓄積されてきた。そこでは、宗教施設（ワクフ施設）の研究が多数をしめ、ワクフ財についての研究は、ワクフ寄進文書や収支簿などの文書史料が必要とされるため、これらの研究が本格化したのは 1980 年代以降である。しかしこれについても、個別のワクフ寄進文書をもちいて、どのような不動産が寄進され財源となっているか、あるいはどの程度の収入があるかという個別研究にとどまり、ワクフという寄進行為の広がりや全体像は推測の域にあった。

２．研究の目的

ワクフとよばれる寄進は、イスラーム社会の宗教施設の経済基盤であるとともに、個人財産の保全の目的にも合致し幅広く活用されてきた。本研究ではオスマン朝初期（１６世紀）に編纂されたダマスクス州のワクフ調査台帳を解読し、基本データを整理してデータベースを作成し、ダマスクス州の社会経済資源の総体とそこにおけるワクフ財の位置と用途を解明する。これによって、寄進財に関わる国家、集団、個人の 3 者の社会関係を明らかにし、他地域との比較を行いながら、宗教と経済の結びついた社会のあり方の分析モデルを提示する。

３．研究の方法

本研究が用いるのは、特定の地域についてワクフ物件の網羅的な調査を行った「ワクフ調査台帳」である。これを用いることにより、特定の時代の特定の地域のワクフ寄進行為とワクフ物件の全体像を描くことができる。本研究が資料とするのは、16 世紀にオスマン朝がシリアの統治を開始するにあたって、国有地とその収穫高の調査（検地）を実施するとともに、ワクフやミルク（私有財）の調査を行った際の記録であり、３冊の台帳がトルコの文書館に残されている。

ワクフ調査台帳は、ワクフ寄進文書の要約を記録したもので、寄進者、寄進目的、寄進年、そして寄進された物件の情報（物件の種別、所在、収入額など）が記録され、３つの台帳で計 3524 件の文書が記録され、寄進物件の総数は概算で 14,000 件にのぼる。

本研究では、これらの情報を読解し、データベース化をおこなう。そののち、関連する同時代資料との照合によって、寄進者や寄進物件の情報を補う。寄進者の階層や寄進目的、寄進対象、寄進物件の統計的分析を行い、だれが、どのような目的で、なにを寄進し、その収益はなにに用いられたのか、というワクフ寄進の全体像を明らかにする。

４．研究成果

シリア州に関するワクフ調査台帳のうち、No.602 に記録された 1343 件のワクフ寄進文書について、寄進者、寄進目的、寄進年、そして寄進された物件の情報（物件の種別、所在、収入額など）のデータを解読し、ファイ

ルメーカーPro を用いて入力し、データベースを作成した。つぎに、この入力データをもとに分析を行った。当該台帳は、ヒジュラ暦990/西暦1582-83年に作成されたと考えられる。なおこの種の土地台帳は、シヤーカト体とよばれる財務文書用の特殊な書体（アラビア文字）で記録されているため、物件についての情報の解読は困難を伴った。2011年にトルコにおいて、シリア州の土地台帳401(942/西暦 1535 年編）の校訂が出版されたので、この台帳と照合しながら、解読を進めた。

分析の結果は以下のとおりである。

（１）寄進目的

台帳に記載寄進の目的（寄進財からの収益の使途）について、①慈善用（宗教施設やその他の福祉のため）　②慈善＆家族用　③家族用、の3種類に分けて分析した。第一の慈善用は、356 文書(全体の 29.4%)、寄進物件数では2, 247件（38.5%）を占める。第二の慈善＆家族用は249 文書（20.6%)、1,349物件(23.1%)、第三の家族用は、606文書(50.0%)、2,235物件（38.3%）であった（但し、一族すべてが死亡した場合は慈善目的に用いられる)。一般に、ワクフの寄進目的は、慈善と考えられているが、寄進物件のすべてが慈善目的に用いられるものは約1/3であり、その収益が寄進者の家族（一族）のあてられる家族用も1/3を占めている。すなわち、ワクフ寄進の目的は、慈善とともに、一族の財産保全のねらいがあったことがわかる。

慈善の対象については、第一はイスラームの二聖都(メッカ、メディナ)用(260文書)、第二はダマスクス最大のマドラサであるウマリーヤ学院（169文書)、第三がウマイヤ・モスク（60文書）となる。ダマスクス最大のモスクであるウマイヤ・モスクよりも、郊外に立地するウマリーヤ学院がこれを凌駕していることは注目される。

(2)寄進年代

寄進年代を、ヒジュラ暦の 50 年ごとに集計すると、下表のようになる。古いものは西暦 12 世紀後半からみられるが、15 世紀後半および 16 世紀前半がそれぞれ 1/3 ずつを占める。ワクフとして寄進された物件は、イスラーム法上は神（ないしイスラーム共同体）に寄進されたものとして永久不変であるが、物理的に使用できなくなったり、あるいは交換の法理を使って私有財に転換したりしていたと考えられる。他方、宗教施設の側からいえば、つねに新しい寄進をあつめ、ワクフ物件を確保しておく必要があったといえる。

Year(AH/AD)	Damascus	ratio
551-600/1204	9	0.8%
601-650/1253	11	1.0%
650-700/1301	22	2.0%
701-750/1350	39	3.5%
751-800/1398	56	5.0%
801-850/1447	184	16.4%
851-900/1495	406	36.2%
901-950/1544	392	34.9%
951-966/1559	4	0.4%
unknown	217	---
Grand Total	1340	100.0%

(3)寄進物件数

ひとつの寄進文書における寄進物件数は、１物件が522文書（38.9%)、２物件が193文書（14.4%）であり、過半一つないし二つの物件（不動産）を寄進するという小規模なものであった。逆にいえば、支配層である軍人や官僚などの富裕者だけでなく、みずからが所有する土地などを家族のために寄進するというワクフが、広がっていたことを示している。

(4)寄進物件の種別

全6,478物件のうち、5,334物件は、土地、果樹園、植樹などの農業資源であり、83.7%を占める。このうち、村（またはその一部）が 871 物件（13.7%）、果樹園が 843 物件（13.3%）、枝村（またはその一部）が494物件（7.7%）となる。同時期の土地台帳によれば、シリア州全体の村落数は 1100 村であるから、平均すればその2/3以上の村（またはその一部）がワクフ財となっていたことになる。土地台帳401によれば、ダマスクスの西に広がるグータ郡は、その2/3の村と枝村がすべてワクフとなっていた。

これに比べ、商店や隊商宿や賃貸家屋などの都市資産は 454 物件（7.1%）にすぎない。都市の市場や商店は、一般にはワクフによって建設されることが多かったので、この比率の低さは意外な結果ともいえる。台帳602に記録される私有財（milk）もその 89%が農業資源であり、全体の傾向としていえば、当時の経済資源としての農業資源の優越は明瞭で、ワクフは、農業資源を都市に還流する役割を果たしていたといえる。

(5)寄進者

寄進者の名前に、官職名や称号が付けられている場合もあるが、約9割は官職名などをもたない「普通の人びと」である。このなかには、居住する村名が記されている場合もあり、村の有力者が複数の不動産を家族のために寄進している。

(6)寄進物件の所在地

ワクフ調査台帳602の寄進文書のうち、200文書について、ワクフ物件の所在地の分析を行った。物件は、ダマスクス州の 42 の郡のうち、34の郡に広がって存在している。なかでも、グータ郡は275物件（29.6%）を占め、ついでバールベク郡が119物件（12.8%）、ダマスクス市が 104 物件（11.2%）を占める。これらのワクフ物件の経営形態としては、同一の人物がひとつの村に複数を不動産を所有し、これを寄進するタイプと、同一人物が異なる村に不動産を所有し寄進するタイプとが見られる。

(7)　結論

以上のデータと分析からから、16世紀のダマスクス州においては、普通の人びとが所有するわずかな不動産を、家族の資産保全のために寄進するという形でのワクフが広く浸透していたこと、多数の農業資源がワクフとなり、都市の宗教施設の運営の基盤となっていたことが明らかとなった。さらに、ワクフ物件は決して永久ではなく、私有財に転化したり、またその後にワクフとして寄進されたりとリサイクル（循環）していたと考えられる。

これらのデータと分析結果は、ヨルダンおよび米国での国際学会において口頭発表を行い、「草の根」レベルのワクフの実態を明らかにするものとして、高い評価をえた。今後さらに、残る二冊の台帳についての詳細データの解読と分析を行う予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

(1)三浦　徹「サーリヒーヤ物語：ダマスクスのある街区から」『イスラーム地域研究ジャーナル』第５号、平成25（2013）年3月、pp.3-18.
（査読なし）

〔学会発表〕（計２件）

(1)三浦　徹　第46回北米中東学会年次大会研究発表　“Waqf Activity of Grass-Roots Level in 16th Century Damascus” 2012 年11月20日　米国：デンヴァー

(2)三浦　徹　第９回シリア史国際会議
“Agricultural Properties of Waqf and Milk Ownership in Damascus Province from the

Mamluk into the Ottoman Period: Preliminary Survey using the Waqf Survey Registers and the Land Survey Registers of the Sixteenth Century ”, The 9th International Conference on the History of Bilād al-Shām: Agriculture in Bilād al-Shām from the Late Byzantine Times to the End of the Ottoman Period, University of Jordan, Amman (Jordan), 1-5 April 2002

６．研究組織

(1)研究代表者

三浦　徹 (MIURA TORU)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：00199952

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

清水　保尚 (SHIMIZU YASUHISA)

東京外国語大学・非常勤講師